

ソプラノ・アリア「咲いたばかりの魅惑のバラは」K.365a
—— ヨハン・ゴットフリート・ディク訳 カルロ・ゴツィの5幕の戯曲
『物事はあなたの思うとおり！ あるいは：眠れぬ二夜』について——

野口秀夫

1. はじめに

犬輔：アリア「咲いたばかりの魅惑のバラは Die neugeborne Rös' entzückt」K.365a は、ヨハン・ゴットフリート・ディク Johann Gottfried Dyk (1750-1813) のドイツ語訳による5幕の戯曲『物事はあなたの思うとおり！ あるいは：眠れぬ二夜 Wie man sich die Sache denkt! oder: Die zwey schlaflosen Nächte』(1780) をエマーヌエル・シカネーダー Emanuel Schikaneder (1751-1812) がザルツブルクで上演するためにモーツアルトに依頼したソプラノ・アリアです。

鳥代：長らく紛失とみなされていた自筆譜の一部が1996に再発見されました。中間部分の30小節だけですが、曲の雰囲気を味わうことができる貴重な発見です。

教授：発見時のデクスター・エッジによる解説^{注1}が現在に至るまでほとんど唯一の記事であるが、諸君たちには新しい見解を追加してほしい。

2. シカネーダー座がザルツブルクに巡業するまで

犬輔：ではK.365aの作曲を依頼したシカネーダー座がどのように生まれ、活動してきたかについて最初に見ておきましょう^{注2}。

鳥代：モーツアルトより5歳年上のシカネーダーは、生まれてから25年間の資料が残っていないため正確な経歴は不明なのね。処女作はコミッシュ・オペレッテ『遍歴樂士、または楽しい悲惨』(1776)とされているわ。役者としての最初の記録は、アンドレアス・ショップフ座の看板役者として1776.10.11にアウクスブルクにおける劇場の柿落し興行で——座長の手になる前芝居『芸術の推奨者、アウクスブルク』に続いて——『諸侯の慈悲』という5幕の悲劇をシカネーダーが主演したといいます。一座のレパートリーは、『ハムレット』『マクベス』『ロメオとユリア』『リチャード三世』(シェイクスピアものはすべて改作されていました)、さらに外国ものではウォルテールの『セミラミス』、ディドロの『家父』。本家のドイツものではレッシングの『ミンナ・フォン・バルンヘルム』『エミリア・ガロッティ』、ゲーテの『クラヴィーゴ』、その他トビアス・ゲーブラー、ヴァイトマン、ハーフナーなどでした。特にハインリヒ・フェルディナント・メラーの『ヴァルトロン伯』はシカネーダーが後に様々な趣向を試みる作品となりました。そして、当時の旅一座の特徴として、バレエのレパートリーを持っていて、たいてい一日のとりをつとめました。『中国人の結婚式』『仕掛け師、あるいは動く絵』『大火事、または煙突掃除夫』『喜遊曲、そして復讐の女神フリアのバレエ』などに加えて『愉快な鳥刺し』というものもあります。シカネーダーは当時の演劇ジャーナルには第一恋人役、第一歌手として記載されているといいます。1777.1.13には『遍歴樂士』を『三人の遍歴樂士』というタイトルで公演。この時共演した一座のエレオノーレ・アルトと1777.2.9に結婚式を挙げます。



E.シカネーダー

犬輔：ところが、理由は不明ですが結婚して2日後に一座と袂を分かち、ヨーゼフ・モーザーの一座に夫妻ともども第一恋人役として契約したんだ。モーザー座のレパートリーはショップフ座よりもさらに反フランス的であり、その分いっそうシェイクスピアとドイツのジングシュピールに比重があったようです。シカネーダーは『ハムレット』『マクベス』『リチャード三世』のそれぞれの主役、『オセロ』のイアーゴを演じて喝采を浴びます。シカネーダーといえばハムレットという名声がここから始まりました。さらに歌芝居もシカネーダーの加入で大いに盛んとなります。

鳥代：モーツアルト母子は1777.10.14にマンハイム・パリに向かう旅の途次にモーザー座を観劇しています。演し物はカール・ルートヴィヒ・ロイリング台本の歌芝居『てんやわんや、あるいは二重の早変わり』、そして締めのバレエ『酔っぱらった農夫』でした。しかし、シカネーダーはお休みの日でモーツアルトとはすれちがってしました。

犬輔：1778.1.8にモーザー夫人が亡くなり、一座を維持することができなくなったヨーゼフ・モーザーはシカネーダーに2000グルデンで一座を買わないかと持ち掛け、シカネーダーは一座を引き継ぐことになりました。アウクスブルク市はまだ残っていたモーザーとの契約期間をシカネーダーが引き継ぐことを好意的に認めたばかりか、翌年1779復活祭までの公演に許可を出しました。幸運だったんですね。

鳥代：冬シーズンが終わって次のシーズンが始まる 1778.9 までの間シカネーダーの一座はシュトゥットガルトにデビューしました。一座は 29 名の役者、22 名の踊り子を擁するまでになっていました。シュトゥットガルトでは『ハムレット』のほかに、レッシング、ゲーテなどの現代もの、アイレンホフ、ヒラーのジングシュピール、ベンダのメロドラマ『ナクソス島のアリアドネ』、とりわけメラーの『ヴァルトロン伯』をオーケストラ付きで上演しています。

犬輔：ニュルンベルクでの 1779.4.26 から 9.27 までの公演許可が下り、役者 22 名、バレエ 14 名でヴァイセ=ヒラーの『楽しい靴屋、または、てんやわんや第二部』、ゲーテの『グッツ』、シェイクスピアもの、ピッチンニのオペラ《女奴隸、または寛大な船乗り》、ヨハン・マルティン・ミラーの『ジークヴァルト』を演じました。

鳥代：ニュルンベルクの契約が切れると、ローテンブルク、ライバッハ、クラーゲンフルト、リンツを巡業し、1780 秋に前々からの目標だったザルツブルクに次の活動地を求めました。

3. シカネーダー座のザルツブルク来演

3.1 在郷中のモーツアルトとシカネーダーとの付き合い

犬輔：シカネーダー座は 1780.9.17 から 1781.2.27 までの間（1780-81 冬シーズン）にザルツブルクで 93 回の公演を行っています。モーツアルト一家と知り合い、芝居の上演にはフリー・パスの扱いとしました。レーオポルトは日曜日に射的に誘うなど遊びの仲間としてもシカネーダーと付き合うほどになりました。

鳥代：シカネーダーが描かれた射撃の的を現代的に再構成したものがありました（右図）^{注3}。

これはどういった場面なのでしょうか。

教授：女たらしの異名を持つシカネーダーが、ある女性（左）を口説いている間に、別の女性（右）が彼の来るのを辛抱強く待っているという図だ。

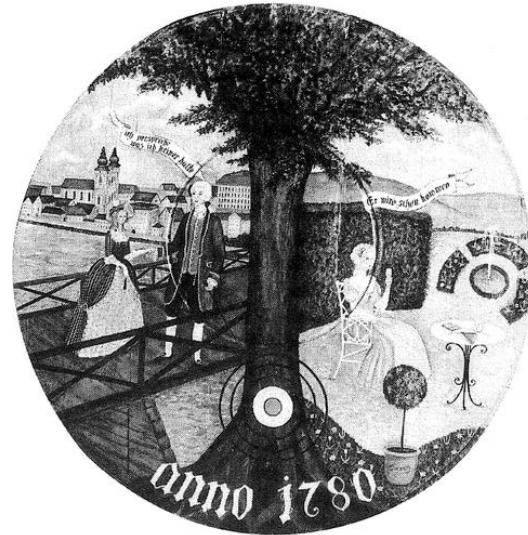
犬輔：モーツアルトは 1780.11.5 に《イドメネーオ》の作曲・上演のためにミュンヒエンに向かいますが、それまでに観た芝居の演目は分かっているのでしょうか。

鳥代：ナンネルの日記帳にモーツアルトが代筆している部分があつて、そこに幾つかの芝居に行ったという記述があります^{注4}。アンガーミュラーの注記によればそれらは以下のとおりです。ゴットリープ・シュテファニー弟、イグナーツ・ウムラウフ音楽による 3

幕のジングシュピール《美しい靴職人、または赤褐色の靴》（1780.9.24 観劇）、パウル・ヴァイトマンによる 3 幕の喜劇『うぬぼれ』とバレエ《後宮の嫉妬》（1780.9.25 観劇）、アントーン・マティアス・シュプリクマンによる 5 幕の喜劇『装飾品』（1780.9.27 観劇）、ゲオルク・ベンダ（台本：クリスチャン・ブランデス）による一幕もののデュオ劇《ナクソス島のアリアドネ》（モーツアルトは 1779 にすでに「素晴らしい」と評価していた）、ヨハン・ヤーコプ・エンゲルによる一幕ものの喜劇『高貴な少年』と、フランツ・ヨーゼフ・マリア・バボによる一幕ものの喜劇『アメリカの冬の宿舎』（1780.9.29 観劇）。

犬輔：以上の作家名や作品名からモーツアルトの作品とのつながりを見ると、ゴットリープ・シュテファニー弟は《後宮からの誘拐》K.384 および《劇場支配人》K.486 の翻案作者で、トビアス・ゲーブラーは《エジプト王ターモス》K.345 の台本作者であり、ヴォルテールの『セミラミス』はフォン・ゲミンゲンのメロドラマ《ゼミーラミス》への音楽 K.315e（紛失）の原作です。また、ゲオルク・ベンダの一幕もののデュオ劇《ナクソス島のアリアドネ》からは《魔笛》夜の女王のアリアのヒントを得たものと思われます。さらに作家名や作品名が参照された例としては、レッシングの『エミリア・ガロッティ』、メラーの『ヴァルトロン伯』を《劇場支配人》の登場人物が言及しますし、『ハムレット』は亡靈の科白が長すぎるとモーツアルト自身が《イドメネーオ》の地の声の長さに関連して述べています。ミラーの『ジークヴァルト』はシュテファニー弟が『劇場支配人』の改訂台本（1792 ですからモーツアルトには無関係ですが）で登場人物に言及させていますね。

教授：当時の聴衆の演劇に対する好みが見て取れるのでこのリストアップは興味深い。モーツアルトもミュンヒエンに旅立った後の不在中にシカネーダー座が上演した演目の詳細をナンネルに手紙で連絡してもらうことで状況の把握に務めている^{注5}。



鳥代：ナンネルはシカネーダーの上演予告も書き写してモーツアルトに送っているわ。

お知らせ。

本日、ありとあらゆる性格劇中の最美なるものを上演したというほまれを持つことを私どもは願っております。役柄はすべて新しく、しかも最上の喜劇的風味で味つけされており、そのため、わが寛大なる後援者の皆さまは、まずくてもしかも温め直しの材料（残念ながらこうしたものはたんとござりますが）で我慢する必要はございません。それどころか、きっとご満足の体で、私どもの舞台をあとにされるであります。そこへとご案内申し上げます。

寛大なる後援者のみなさま

恐惶謹言
座長シカネーダー

犬輔：すぐに劇場に芝居を観に行きたくなるお知らせですね。タイムスリップした感じがします。

3.2 ミュンヒエンに出発した後のモーツアルトとシカネーダーとの付き合い

犬輔：ミュンヘンに到着した後、モーツアルトは故郷への最初の手紙（1780.11.8付け）で次のように書いています。

シカネーダーさんによろしく。アリアをまだ送れないことをどうぞ許してもらってください。まだ、うまく仕上がっていらないものですから。――

教授：追々分かることだが、このアリアが「咲いたばかりの魅惑のバラは」K.365aである。この内容からすると、すでにザルツブルクで作曲が開始されていたようである。

鳥代：なかなか送ってこないことにしひれを切らしたレーオポルトは1780.11.18の手紙で強い口調の督促をしています。

愛する息子よ！

まあ、おまえは何を考えているのだ！―― 私たちはシカネーダーさんのお宅でひどく恥をかかなくてはなりません。私の靈名の祝日（11.15）に、射的をしたとき、私は彼にこう言ったのです。『明日にはアリアが確実に着きますよ。』―― 絶対間違いはないものと予想していたのだから、この私がなにかほかのことでも彼に言えただろうか？―― その1週間前に、私は彼に言わなくてはならなかつたのです。『息子はまだ全部は書き終えてはいないのでしょうか。』って。おまえはそれから1週間もたてば、それを郵便馬車で送れるだろうって、疑える余地はまったくもつてなかつたが、彼があとわずか12回しか喜劇を打たないことになるからなおさらのことでした。明日、射的に彼がやってきたとき、私は実際なにを話題にしたらよいのか分かりません。おまえはこの私が嘘をつくのが嫌いなことは知っているはずです。―― 私はこう言うしかありません。『あの子は郵便馬車に出しあくれたようですが、特別の郵送料は高くつきすぎるようです。アリアは次の郵便馬車で確実に着くでしょう。』ところで、私は二度も嘘つきになるのは望みません。だって、三人もの人間が、これほど長い期間、フリー・パスで劇場の座席が全部持てるなんて大変なことだからです。

犬輔：1780.11.20には2度目の督促があり、泣き落としが入っています。

シカネーダー用のアリアは、きっと郵便馬車で受け取れるものと思っています。そうあってはほしくないが、もしおまえはまだアリアを郵便馬車に差し出していないのだったら、郵便に出して下さい。シカネーダーは全部払おうというのです。私は恥ずかしいのです。あの誠実で立派な方は、おまえの出発に立ち会おうと、おまえと一緒に駅馬車に駆けてまで行ってくれたのです。

鳥代：ヴォルフガングは最終的に、1780.11.22付けの手紙とともに、遅れた言い訳を添えてアリアを送ったのね。

やっといま、ずっと前から約束していたシカネーダーさんのためのアリアができました。―― 初めの1週間は、他の仕事があって、だからこそぼくはここに来ているわけですが、まったく仕上げられるような状況ではありませんでした。―― しかも、このあいだは―― ひどいお喋り好きであるさ型のバレエ主任、ルグランがたまたま来宅していて、彼のお喋りのために郵便を送る機会を逸してしまいました。

犬輔：ナンネルは1780.11.30付け手紙で曲の上演準備について書いています。なお、以下において“芝居”はオリジナルでは“Comoedie”となっていることに注意ください。

シカネーダーさんはあなたのアリアにとっても満足しています。それに歌い手もしっかり勉強することでしょう。彼女はこのアリアを私たちのところで勉強しているからです。でも時間が少なすぎ、明日にはもう芝居が舞台にかけられます。この芝居で彼女がこのアリアを歌うはずです。

鳥代：モーツアルトのアリアは1780.12.1の上演で歌われ、その翌日のレーオポルトの手紙にその様子が記されています。

おまえのアリアがついた芝居は昨日ありました。―― 芝居はものすごく立派なものです。劇場は満員でしたし、大司教も臨席していました。アリアは見事に舞台にかけられ、彼女はアリアを立派に歌いました。―― 短い間に勉強したにしては可能なかぎり立派だったわけです。だって、彼女も[フランツィスカ・]バロと同じで、怠け者だからです。芝居が9時半過ぎまで続いたにもかかわらず、みな満足して劇場から出てきました――

教授：この歌手は 1780.10.22 にデビューし、ナンネルとタロック遊びをするほどの仲になったシカネーダー座の歌手の一人、マドモアゼル・アーデルハイトであろうと言われている。

鳥代：大司教コロレードの臨席は演目ゆえのことなのでしょうか。それとも偶然なのかしら。

犬輔：次の 1780.12.13 付けのヴォルフガングからの手紙に戯曲の名前が初めて出て来ますが、その戯曲にアリアを書いたとは明言していません。

喜劇『物事はあなたの思うとおり、別名、眠れぬ二夜』は面白い作品です。ぼくは当地で見ました。――

いや、いや、観たわけではありません、読んだのです。なぜって、まだ上演されてませんからね。それに、暇がないので――劇場にはまだ一度しか行っていません――というのも、夜はぼくにとってやはり仕事をするのにいちばんお気に入りの時間ですから。――

鳥代：手紙を受け取る側のレーオポルトは最初から戯曲名を知っていたはずですから、なにも手紙で詳述する必要はなかったでしょう。でも、アリアを作曲してから数週間たっているのに、ヴォルフガングがわざわざこの作品を読んだばかりであることをほのめかしているように見えるのはおかしいですね。

教授：暇がないということから、台本を通読することなしに、作曲する範囲のみに限った歌詞をとりあえず読んでいたという可能性は大いにあります。この作曲姿勢が許されるであろうことは当該戯曲におけるアリアの位置づけを知ることによって分かってくるだろう。

犬輔：レーオポルトは 1780.12.15 付け手紙で最終的に劇のタイトルとヴォルフガングのアリアとの間に明確な関連性を示しています。但し 11 月下旬から 12 月上旬にかけてレーオポルトはひどい風邪とリウマチの発作に苦しんでいて、その回復への記述が主なのですが。

厚着をして芝居に出かけました。足おおいも忘れませんでした。劇場はかなり満員でした。バリザーニ家のトレーゼルの隣に坐りました、芝居は 3 時間半も続きました。私はものすごく汗をかいだので、家に帰って、暖炉の傍らで別のシャツに着がえなければなりませんでした。さて、大問題は、接骨木（にわとこ）の花のお茶が発汗させたのか、それともトレーゼ・バリザーニがそうさせたのか、それとも、この待ち望んでいた効果は両者のおかげだったのかなのです。―― おまけに、この喜劇『眠れぬ夜』をおまえのアリアで聴かされたのですが、それにはなんの役にも立ちませんでした！

鳥代：ナンネルも 1780.12.18 付けの手紙でシカネーダーの上演演目をリストアップし、次のように書いています。

ここで待降節前のお芝居のしめくくりをつづけます。46 回目のお芝居『眠れぬ夜』のことはもう書きました。

教授：ナンネルはすでに 1780.12.1 の戯曲上演直後に一通手紙を書いていたが、それが紛失しているのだろうと、ザルツブルクにおけるシカネーダー座を研究したブリュムルが述べていることだ。

犬輔：ところで、喜劇『物事はあなたの思うとおり！ あるいは：眠れぬ二夜』はどのような戯曲なのでしょうか。

教授：ネットで台本にアクセスできるから^{注6}、諸君たちで調べてみなさい。

4. 5 幕の戯曲『物事はあなたの思うとおり！ あるいは：眠れぬ二夜』

4.1 戯曲の原作及び翻案

鳥代：エッジによれば、この戯曲の原作はスペインのカルデロンの戯曲で、ゴッツィのイタリア語翻訳、ヴェルテスのドイツ語翻訳を経て、ディクのドイツ語版がシカネーダーの上演時の台本となっているとのことです。

犬輔：それぞれの作者と作品名を表にしておきましょう。

表 1 『眠れぬ二夜』の原作と翻訳

作者	戯曲作品	初版
P.カルデロン・デ・ラ・バルカ Pedro Calderón de la Barca (1600–81)	欲望と嫌悪は想像以上のものではない Gustos y disgustos son no más que imaginacion (スペイン語)	1657
C.ゴッツィ Carlo Gozzi (1720–1806)	眠れぬ二夜 Le due notti affannose (イタリア語)	1771
F.A.C.ヴェルテス Friedrich August Clemens Werthes (1748–1817)	眠れぬ二夜、あるいは想像の騙し合い Die zwey schlaflosen Nächte oder der Betrug der Einbildung (ドイツ語)	1779
J.G.ディク Johann Gottfried Dyk (1750–1813)	物事はあなたの思うとおり！あるいは：眠れぬ二夜 Wie man sich die Sache denkt! oder: Die zwey schlaflosen Nächte (ドイツ語)	1780

鳥代：カルデロンは17世紀スペイン・バロック演劇の代表的な劇作家、詩人であり、——『当世コメディア新作法』などでロペ・デ・ベガの提唱した——「新しい演劇」（三幕、二重プロット、悲喜劇、王侯貴族と平民の混在、名譽と信仰のテーマ）を継いでいますが、さらに、修辞を駆使した、緻密で哲学的な独自の作風を築き上げたといわれています。代表作である『人生は夢』にはコメディアと神秘劇の両方が内在します。

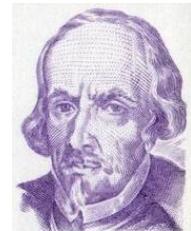
犬輔：ゴツツィはヴェネツィア出身のコンメディア・デラルテの劇作家で、伝統主義的な人物でした。同時期の写実的風俗劇を生み出したゴルドーニ等の作家を批判する文章を多く残しています。『三つのオレンジの恋』『トゥーランドット』が代表作ですね。

鳥代：ヴェルテスはテュービンゲン大学を出た詩人で、ヴィーラントの創刊した文芸誌トイチエン・メルクール *Teutschen Merkur* に従事し、カルロ・ゴツツィとルドヴィコ・アリオストを翻訳しました。

犬輔：ディクは「ディク書店 Dyk'sche Buchhandlung」の息子として生まれ、ライプツィヒ大学に入学した後、ヴィッテンベルク大学に転校、マジスターの学位を取得し学業を終えた後、父親の書店を引き継ぎました。彼自身、いくつかの戯曲を書き、舞台化を行い、書店に並んだフランス語やイタリア語のさまざまな作品を翻訳、文芸新聞「美術学と自由芸術の新しい図書館」の編集を引き継ぎ、教育学や歴史に関する論文も出版しました。

4.2 原作及び翻訳版戯曲の内容

犬輔：元のプロットは、アラゴン王ドン・ペドロ2世（1174–1213）に関するもので、カルデロンにとって非常に大胆なものだったといいます。ドニヤ・ヴィオランテは劇中ドン・ヴィセンテと結婚しますが、新婚女性に対するペドロ王の欲望によって彼らの安寧は脅かされます。国王は、自分の愛すべき妻であるマリア王妃に性的魅力を感じていません（領地獲得の目的で死別・離婚の経歴のあるマリアと政略結婚しましたが、領地が手に入った今では遠ざけるようになっていました）。しかし、彼女の巧妙さと、夜の闇によって促進された一連の混乱を通じて、ペドロは非常に興奮した状態で彼女を愛し（彼女がヴィオランテであると信じて）、息子すなわち王位継承者（将来の「征服王」ハイメ1世）を妊娠させます。カルデロンは「欲望と嫌悪は主に自己暗示と勘違いの問題であるが、主題としての幻想を非常に極端な感情に動かすことができる」というテーマを非常に慎重に展開しているとのことです^{注7}。



カルデロン

鳥代：史実とすれば随分ひどい話ですけれど、話が繰り返される中で徐々に尾ひれがついて「奇跡的な」誕生の物語に膨らんでいったとハイメ1世自身が語っていますから^{注8}、伝説の類と見てもいいでしょう。ゴツツィ版ではどこが改訂されたのでしょうか。

犬輔：プロットの本質的な要素のほとんどは同じで、主要な登場人物も同じです（名前が似ているし、わずかに変更されているだけです）。但しゴツツィとそれに続く翻訳者がドン・ピエトロ王に「イル・クルードル」という異名を誤って付けているのは、実際にはアラゴンではなくカステイーリヤの「残酷なペドロ」（1334–1369）王であり、100年以上も後の人物です（たまたま彼も妻を遠ざけましたが！）。ドンナ・マリアはゴツツィではメティルデに改名され、主役の召使と親友はコンメディア・デラルテの人物に変えられています。ゴツツィで初めてレチタティーヴォとアリアが第4幕第5場の終わりに見られます。メティルデは、彼女の年老いた親友パンタローネが手配した祝賀会とコンサートを主催しています。その目的を念頭に置いて、パンタロンはできるだけ多くの若い男性をパーティに招待しました。一方、ドン・ピエトロ王は、彼の欲望の対象であるドンナ・ヴィオランテ、つまりかつての同盟国であるモンフォルテ伯爵の娘を誘拐することを望んで、部下と親友のタルタリアと一緒に宮殿の外に潜んでいます。コンサートの過程で、匿名の歌手（アリアは主人公によって歌われるのではありません）がバルコニーに現れ、歌います^{注9}。



C.ゴツツィ

鳥代：ヴェルテス版、ディク版はどのように変わっているのですか？

犬輔：レチタティーヴォとアリアに限って言えば、ヴェルテス版はゴツツィ版のかなり文字通りの翻訳ですが、ディク版は第4幕第6場の終わりに配置されていて、レチタティーヴォはヴェルテス版を詩的に作り直したもので、アリアは同じ感情を反映していますが、まったく新しいものとなっています^{注10}。

教授：ディク版の後にフリードリヒ・ヴィルヘルム・ゴッターが、『不安な二夜、または欲望と嫌悪 Zwei unruhige Nächte, oder Neigung und Abneigung』というタイトルのバージョンを作成し、ライプツィヒ 1781、1786、1788；アウクスブルク 1794 で出版した。このような版種の多さは、この劇の人気を十分に証明している。このモチーフは、ドイツではロマン主義以前の想像力に強く訴え、特に主題の創造力に対する関心の高まりに強く訴えたという^{注11}。

4.3 ディクによる5幕の戯曲『物事はあなたの思うとおり！あるいは：眠れぬ二夜』

教授：ディク版は1780.7.12にライプツィヒでボンディーニ座によって初演されたようだ。ハンブルグのシュレーダー座、ブレスラウのヴェーザー座の公演がすぐに続いた。

犬輔：ディク版の表題を訳してみましょう。

Wie man sich die Sache denkt! oder: Die zwey schlaflosen Nächte. Ein Schauspiel in fünf Akten Von Karl Gozzi, Für deutsche Theater bearbeitet. Leipzig, im Verlage der Dykischen Buchhandlung, 1780.	物事はあなたの思うとおり！ または：眠れぬ二夜。 5幕の戯曲。 カルロ・ゴッツィによる、 ドイツの劇場用に編集。 ライプツィヒ、 ディク書店の出版部にて、 1780。
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------

鳥代：ジングシュピールではなくて戯曲なのです。

教授：さっき犬輔君も触れたように歌は主人公でなく、歌手役が歌う。しかも劇の中で1曲のレチタティーヴォと1曲のアリアが歌われるだけなのだ。したがって、ジングシュピールとも、況やメロドラマとも劇音楽とも言えない。

鳥代：ディクによる序文がありますので訳しましょう。重要と思われる部分を太字にしました。

ゴッツィ伯爵は、本劇の素材を求めました。それはカルデローネによるスペイン語の劇『欲望と嫌悪は想像以上のものではない Gustos y desgustos son no maj que imaginazion』から借りたものです。1771.1.1、ヴェネツィアのサン・サルヴァトーレ劇場でサッキ座によって初演され、9晩にわたって連続して上演されました。それ以来、毎年冬に演奏されています。最後の2幕には、スペイン起源の顕著な痕跡がまだ残っています。観客がこれを不審に思わないように、私は役者にスペインの古い衣装で演じるようにと言います。侯爵の役を引き受ける諸君には、無理をせず、従者や理髪師ではなく、身分のある人物であることを忘れないようにお願いしたい*）。イタリア人がスペイン人に対して取った自由が、イタリア人に對して私が適用した自由も許してくれることを願っています。劇のプロットについては、少しも変更されません。しかし、私は言語を完全に再配置しました：仄めかされたヴェネツィアへの言及は省略し、ナポリ人はフランス人にしました、などなど。ゴッツィは、ゴルドーニの演劇が他のほとんどのイタリアの舞台が思いとどまらせた古い演劇のマスクをまだ保持しているサッキ座に、彼のすべての演劇を供給しています。そのため、ゴッツィの信奉者とゴルドーニの信奉者は、イタリアで激しい文学論争を繰り広げています。ゴッツィの演劇を私たちの劇場に適応させたい人は誰でも、必然的にパンタロン、タルタリア、トリュファルディン、スマラルディーナの役割を完全に作り直さなければなりません。さもなくば、劇場のドイツの観客にとって冒険的で理解できない何かが出てきます。私のゴッツィの編集が気に入らない人がいたら、新しいものを作ってください。それが私のものに取って代わる価値があるなら、私は幸せになります。でもそれ以上に嬉しいのは、私たちがすぐに十分な数の私たち自身の優れた戯曲を手に入れれば、劇場で夕方に数時間楽しむために外国人の作品を翻訳したり変形したりする必要がなくなるでしょう。1780.5.1、ライプツィヒにて記述。

ディク

*) 地元の劇場でこの役を演じるクリスト氏は、まさに私がそれを採用する際に考慮した人物です。

犬輔：登場人物は私が訳しましょう

Personen:	配役
Peter, der Grausame, König von Aragonien .	王ペーター、残酷王、アラゴンの王。
Mathilde, dessen Gemahlin.	マティルデ、その王妃。
Wilhelm Graf von Montfort, Oberstallmeister.	モンフォール伯爵、ヴィルヘルム、首席補佐官。
Laurana, seirie Tochter, insgeheim verheiratet an	その娘ラウラーナ、密かにカステッロ伯と結婚している。
Friedrich Graf von Castello, Grand von Spanien.	カステッロ伯爵、フィリードリヒ、スペイン大公。
von Pignani, Kaushofmeister der Königin.	フォン・ピニャーニ、王妃の執事。
von Tourbillon, Marquis, Kammerherr und Favorit des Königs; ein Franzose *)	フォン・トゥールビヨン〔“旋風”の意味〕侯爵、宮廷の貴族で王のお気に入り；フランス人*)
Sinette, Kammerfrau der Donna Laurana.	ジネッティ、ドナ・ラウラーナの侍女。
Baptista, Bedienter des Grafen Castello.	バプティスタ、カステッロ伯爵の召使。
Eine Sängerin.	女性歌手。
Pagen, Jäger, Bediente, die nicht sprechen.	科白なしの小姓、狩人、使用人。
Der Schauplaß ist nahe bei Saragossa und in Saragossa.	劇の場所はサラゴサに近い、ザラグッサ。
*) Kann in französischer Kleidung geben.	*) フランス風の衣装を着てもよい。

鳥代：ではレチタティーヴォとアリアがある第4幕第6場の翻訳です。

<p>Vierter akt. Sechster Auftritt. Der König, Tourbillon. Beide sind in Mäntel verhüllt, und kommen durch eine Allee aufs Theater,</p> <p>Der König. (im Heraustreten.) Die Kerls sind doch bereit? Tourbillon. Oui, Sire! Der König. Hören Sie! Graf Castello hat sich bei mir beurlaubt, und ist mit den Truppen abgegangen. Seine Gemahlin macht einen Besuch bei meiner Frau, das weiß ich. Sie muß bald nach ihrem Palast zurückfahren. --- (Führt thu an eine Geltencoulisse.) Sehn Sie, dort steht schon ihr Wagen. In den Alleen ist es bereits stockfinster. In der Mitte der zweiten erwarten wir den Wagen, fallen ihn an, und entführen die schöne Spröde. --- O Himmel, laß diese Nacht glücklicher für mich sein, als die letzte!</p> <p>Tourbillon. Das wird sein! Das wird sein! Le plan est joli! Votre Majesté a l'esprit des Chevaliers de la table ronde.</p> <p>Der König. Treten Sie dort hin. --- Geben Sie wohl Acht, wenn sie herauskommt, damit wir zeitig genug am Plaß sind.</p> <p>Tourbillon. Ser wohl! Ser wohl! --- Sie soll uns nich entwisch die klein Exe! (Geht hinter den Gartensaal.)</p> <p>Der König. (allein.) Liebe! Liebe! wozu verleitest du mich? --- Weg, Gewissenserupel! Verdient sie, verdient ihr Vater, verdient Castello nicht, daß ich mich an ihnen allesamt räche? --- Und bin ich mir selbst denn nichts schuldig? --- Ah! daß ich sie schon in diesen Armen hielt', und Nach' und Liebe zugleich befriedigte!</p> <p>Tourbillon. (kömmt eilig zurüd.) Ah, Sire! Nous sommes perdus. Ein Page ist gekommen zu saken, daß der Wagen sollt' fahren nack Aus lebik: la Donna restera auprès de la reine.</p> <p>Der König. Das wäre? --- Unmöglich! --- Gehen Sie doch! Fragen Sie doch nach! --- --- Weht dir, Mathilde, wo du es bist, die Lauranen zurückhält!</p> <p>Tourbillon. Ick geh, Eur Majestät! Ick geh! (Geht durch das Gitterthor ab.)</p> <p>Der König. Sollte man glauben, daß einem Könige so viele Hindernisse im Wege stehn könnten, und bei einer bloßen Privatsache? --- Eher soll aber auch alles zu Grunde gehn, als ich sie nicht hinwegschaffe! Was hilft mir königliche Gewalt, wenn ich keinen Gebrauch davon mache? --- (Nach einer Pause.) Es ist wahr, ich könnte Gebrauch davon machen zum Behuf der Unschuld, --- zur Ermunterung des Fleißes, --- zur Aufrechthaltung der Gesetze, die ich von</p>	<p>第4幕 第6場 王、トゥールビヨン。 二人とも外套を纏って劇場への道を 降りてくる。</p> <p>王 (踏み出して) すべて準備はできているか? トゥールビヨン はい、王様！ 王 聞きたまえ！ カステッロ伯爵には休暇を取らせ、部隊と一緒に立ち去らせた。彼の夫人が私の妻を訪問していることをわしは知っている。彼女はすぐに館に戻らなければならぬ。—— (フランス語でクリスと呼ばれる引き戸に案内する) 見たまえ、彼女の馬車はもうそこにある。大通りはすでに真っ暗だ。我々は2つ目の通りの途中で馬車を待って攻撃し、美しい澄ました女性を誘拐する。—— おお、神よ、この夜がわしにとって有終の夜として幸運であるように！</p> <p>トゥールビヨン そうなりますよ！ そうなりますよ！ 階下は円卓の騎士の精神をお持ちです。</p> <p>王 そこに踏み込みたまえ。—— 時間内にその場所に着けるように、彼女が出てきたら注意してくれ。</p> <p>トゥールビヨン 結構！ 結構！ —— 小さな魔女は私たちから逃げるべきではありません！ (庭園向きの広間の裏に行く)</p> <p>王 (一人で) 愛よ！ 愛よ！ お前はわしを騙してはいないか —— 去れ、良心の呵責！ 彼女にふさわしいことか、彼女の父親にふさわしいことか、カステッロにはふさわしくないことか、わしが彼ら皆に復讐することは？ —— そして、わしは自分自身に何も負い目はないのか？ —— ああ！ わしがすでに彼女をこの腕に抱きしめ、欲望と愛を同時に満たしていたことに！</p> <p>トゥールビヨン (急いで戻ってくる) ああ、王様！ 私たちは負けました。馬車は誰も乗せずに出て行くにちがいないと小姓が言いにきました。彼女は王妃と一緒にいますよ。</p> <p>王 なんと？ —— まずいことに！ —— 行ってくれ！ 問い詰めてくれ！ —— マティルデよ、お前は災いだ！ ラウラーナを引き止めているのはお前だ！</p> <p>トゥールビヨン 行きます、陛下！ 行きます！ (格子門から出る)</p> <p>王 単なる個人的な問題ではあるが、これほど多くの邪魔が王の前に立ちはだかる可能性があるとは信じられることだろうか？ ---しかし、わしがそれらを取り除けないでいるうちに、すべてが台無しになつてしまつ！ 王権はわしが使わなければ何の役にも立たないのではないか？ —— (一息ついて) 確かにわしは罪を犯さないために、 —— 勤勉さを奨励するために、 —— 法を守るために、王権を利用することができた。臣下に知つてもらいたいのは、結局、わしを王にするのは彼らだということだ。 ——</p>
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

meinen Unterthanen beobachtet haben will: denn am Ende sind sie es, die mich zum Könige machen. --- (Geht nachdenkend auf und ab.) Die Liebe der Unterthanen ist das schönste Kleinod eines fürstlichen Diadems. --- Eine unschuldige Gemahlin --- die mich liebt --- und die ich unterdrücke. --- Ich thue unrecht! --- Aber dieses Toben in meiner Brust --- ich muß es stillen! (Heftig.) Laurana, ich muß dich besitzen, und wenn, nach deiner Umarmung, der Abgrund sich unter mir öffnen sollte! — (Gelassen.) Aber auch nur dieser Streich vollbracht, und ich will besser, meiner Pflicht wahrnehmen! --- (Wendet sich und sieht den Marquis kommen.) Nun, Marquis?

Tourbillon.

Sire, ick kann nicks thun, als sucken die Akseln. Voiez! die Simmer der Königin, wie sie find erleucktet! Sie giebt Concert, Soupé, Bal. On ne voit qu'Equipages sur Equipages. Es sind son da ein aktsig Personen. Ick sprack mit dem alten Pitzkop de Pignan. Il dit: la reine voulait aussi vivre pour elle, & jouir du monde. La Comtesse de Castello resterait chez elle tout le tems que Monsieur le Comte serait en campagne, &, on donnait aujourd'hui ce festin pour sa reception comme Dame d'honneur. --- Votre Majeste me permettra de la prier d'abandonner l'intrigue avec la Comtesse. La reine la fait & ne cessera pas de la contrecarrer...

Der König.

(einfallend.) Um so mehr verdoppelt sich meine Leidenschaft --- und mein Haß gegen Mathilden! --- Ob ich hineingehe? --- Der Gegenstand meiner Anbetung und der Gegenstand meines Abscheus in Einem Zimmer? Bis Castello wiederkommt, immer beisammen? --- Und ich dulde das? --- Kann das Schicksal mit dem verworfensten Menschen grausamer spielen, als mit mir? (Steht tiefesinnig. Man hört Instrumente stimmen.)

Tourbillon.

Ecoutez! le concert commence.

Der König.

Sie hält mir nicht nur Lauranen vor, sie spottet auch meiner durch Lustbarkeiten!

Tourbillon.

Ah! die schön Sängerin vortritt!

(Eine Sängerin steht im vordersten Fenster der Galerie und singt Folgendes:)

Recitativ.

Wie grausam ist, o Liebe, nicht dein Spiel!
Von ferne zeigst du unserm Herzen
Ein füßes Wonn und Glücksgefühl:
Und ach! wie oft wird es Gefühl der Schmerzen!
Wir freuen uns der süßen Wunden,
Die uns dein Pfeil jezt schlägt;
Allein das Gift, das er uus in den Busen trägt,
Wird bald zu unsrer Qual empfunden.

Arie.

Die neugeborne Rös' entzückt,
Mit Reiz vom jungen Lenz geshmückt:
Doch willst du sie am Stocke brechen,
Dich werden ihre Dornen stechen.
So laden tausend Schmeicheleyn
Der Liebe zum Genuß dich ein,
Und Unitreu, Gram und Eifersucht
Sind meistens ihre Frucht. *)

(上ったり下ったり考えながら歩く) 臣民への愛は、王冠の最も美しい宝石だ。—— 無邪気な妻—— わしを愛している—— そしてわしが抑圧している妻。—— わしは間違っている! —— だが、この胸の中で荒れ狂うもの—— わしはそれを静めなければならない! (激しく) ラウラーナ、わしはあなたを所有したい、その結果、抱擁の後に深淵が足下に開くとしても! —— (気を静めて) しかし、このたくらみを実行するに当たり、わしは自分の義務をよりよく果たしたいと思っている! —— (振り向いて、侯爵がやって来るのを見る) 侯爵か?

トゥールビヨン

王様、肩をすくめるしかありません。御覧ください! 王妃の部屋、なんて明るいんでしょう! 彼女はコンサート、ディナー、舞踏会を提供します。馬車の上には御者しか見えません。そこにはすでに80人がいます。ピッソコプ・デ・ピニヤン老と話しました。彼は言います:「王妃も彼女のために生き、世界を楽しみたいと思っていました。カステッロ伯爵夫人は、伯爵が遠征している間は家にいて、今日、彼女が名誉の貴婦人として迎えられるために、この饗宴が行われました」。 --- 彼女と伯爵夫人との陰謀を放棄するようにと、私が彼女にお願いするのを、陛下は許可なさるでしょう。王妃はそれを妨害することを止めないでしょうが…

王

(入場して) わしの情熱はますます倍増し、マティルデへの憎しみも倍増する! —— 入っていこうか? —— 憤れの対象と嫌惡の対象が同じ部屋に? カステッロが帰ってくるまでずっと一緒に? —— そして、わしはそれを許容するのか? ---運命は残酷にも、わしよりも堕落した人と戯れができるというのか? (深く考え込む。楽器のチューニングが聞こえる)

トゥールビヨン

お聴きください! コンサートが始まります。

王

彼女はラウラーナのことわしを非難するだけでなく、陽気にわしを嘲笑するのだ!

トゥールビヨン

ああ! 美しい女性歌手が前に出ます!

(歌手が回廊の正面の窓に立って、次のように歌う)

レチタティーヴォ

おお愛よ、残酷ではないか、そなたの遊びは!
遠くからそなたはわれらの心を刺す。
甘い歓喜の感情、そして幸運の感情:
そしてああ、なんと屡々苦痛の感情がくることか!
われらは甘く傷ついた自分を喜ぶ。
そなたの矢が今やわれらを打ったからだ:
しかしながらその毒は、われらの胸に運ばれ、
まもなくわれらに苦痛を感じさせる。

アリア

咲いたばかりの魅惑のバラは
誘惑をもって瑞々しい春で着飾る:
しかしあなたがバラの茂みを壊すならば、
彼女のとげはあなたを刺すだろう。

その通り、数多の甘言が
あなたを愛の楽しみに誘う。
そして不誠実、深い悲しみ、嫉妬が
たいていその産物となる。*)

<p>Der König. Welche Frechheit! --- Marquis, haben Sie's gehört? Mathilde läßt meine Schande öffentlich absingen.</p> <p>Tourbillon. Mais pardonnez --- sie nick weiß, daß wir sind ier. L'air était joli, und sie sildert den Sustand der Königin, den Sustand der Gräfin Castello so kut, als den Eustand von Eur Majestät.</p> <p>Der König. Sie betrügen sich! Ich kenne diese Schlange! So weich, so glatt, sich windend wie ein Regenwurm; aber auf einmal sich bäumend, und wehe dann dem, den sie faßt! — Hüten Sie sich, Marquis, vor winselnden Frauenzimmern! (Geht auf und ab. Der Balcon wird geöffnet und das Theater immer finstter.)</p> <p>*) Herr Hiller hat diese Verse in Musik gesetzt. Man sehe Vademeum für Liebhaber des Gesangs und Klaviers, S.82.</p>	<p>王 何と図々しい！—— 侯爵、聞いたか？ マティルデはわしの恥を公に歌わせおった。</p> <p>トゥールビヨン お許しなさいませ —— 王妃は私たちがここにいることをご存知ありません。アリアは綺麗で、そして彼女は、王妃の状態、カステッロ伯爵夫人の状態を、陛下の状態と同じくらい鋭く描写しています。</p> <p>王 君は自分自身を欺いている！わしはこのたぐいのヘビを知っている！とても柔らかく、とても滑らかで、ミミズのように身もだえしている。しかし、突然立ち上がり、彼女が捕まえたものに苦痛を与える！—— 侯爵よ、泣き言を言う婦人たちには気をつけよ！（上ったり下ったりして歩く。バルコニーが開き、劇場が暗くなる）</p> <p>*) ヒラー氏はこれらの詩を作曲しました。『歌とクラヴィアの愛好家のための便覧』p.82を参照してください。</p>
-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

犬輔：トゥールビヨン侯爵のフランス語をイタリック体で表記してくれたんですね。それにも彼はひどいフランス語訛りのドイツ語を喋るものです。Hexe が Exe になるのはともかく ich が ick、nicht が nick というのは印刷物になると理解に苦しんでしまいます。

鳥代：正直言って、意味不明のところは適当に訳したところもあります。不備のところを皆様からご教示いただければ幸いです。

犬輔：モーツアルトが作曲する前にはヨハン・アダム・ヒラーJohann Adam Hiller (1728–1804) の曲が使われていたということが分かります。楽譜は残っているんですか。

教授：ディクの書店から出版された『歌とクラヴィアの愛好家のための便覧』(1780、ライプツィヒ) は現在も数冊か残っている^{注12}。第3部にヒラーの11曲がクラヴィア伴奏譜で載っており、その10曲目がレチタティーヴォとアリアである。目次には「この作品は、3ターラーで出版社の店にて手書きのスコアで入手できます」と書いてあり、もともとは声楽とオーケストラのために書かれたものであることが明らかだ。

鳥代：レチタティーヴォは変ホ長調C拍子のモダラートで始まりアレグロに至る33小節で構成、アリアは同じ変ホ長調C拍子のアンダンテで112小節です。モーツアルトのアリアはイ長調でテンポの表記はありませんがアレグロと考えられますので全く異なります。

5. モーツアルトのアリア「咲いたばかりの魅惑のバラは」K.365a

犬輔：モーツアルトのレチタティーヴォは発見されていませんが、おそらく作曲されたものと思われます。

鳥代：アリアは中間の30小節だけが発見されたわけですが、歌詞は最初の7語以外はすべての単語が使われています。強拍の音節を太字に、歩格をスラッシュで区切りました。

[Die neu//gebor//ne Rös' // entzückt,
Mit Reiz // vom] jun//gen Lenz // geschmückt:
Doch willst // du sie // am Sto//cke brechen,
Dich wer//den ih//re Dor//nen stechen.
So la//den tau//send Schmei//cheleyn
Der Lie//be zum // Genuß // dich ein,
Und Uni//treu, Gram // und Ei//fersucht
Sind mei//stens ih//re Frucht.

今まで談話室ではオペラ・セーリアのアリアばかり聴いてきましたので、第1節と第2節が対比して作曲され、ダ・カーポ形式になることが普通でした。また、各詩行の音節数から韻律上の特徴を見出していました。今回はドイツ語の歌詞ですので、どう音楽に結び付けるのがいいのでしょうか。

教授：ドイツ語の詩も詩行と節に区切られており、脚韻を踏んでいる。しかし、強弱の音節の整え方はイタリア語の詩とは異なり、次の規則がある。強音節は辞書にあるアクセントと一致する。強音節が2つ続く場合は片方を弱音節とみなす。弱音節は3つ以上続かない。強弱で始まる詩行 *Trohäuser* と弱強で始まる詩行 *Jambus* がある（まれに弱々強で始まる詩行は *Anapäst*）。普通は1篇の詩の中で強弱格と弱強格を混ぜない。強弱で終わる詩行を弱勢終止、強で終わる詩行を強勢終止といい、その両方を交替させる詩が多い^{注13}。

犬輔：この詩は弱強格 Jambus で統一されていますね。思うにドイツ語は冠詞や前置詞で始まる文章が多く、動詞や名詞は2番目以降に来るわけですから、ドイツ語詩行はヤンブスが多くなり、したがってアウフタクトの小節が多くなる傾向にあると言えるのではないでしょうか。実際ヒラーのアリアも K.365a もこの特徴が出てています。

鳥代：ところで、ヒラーはコロラトゥーラの走句を第1節の最後の単語「刺す stechen」が4回歌われるうちの2回（譜例1.2）に与えていますが、それ以外の単語には装飾を与えていません。これはダ・カーポ・アリアに馴れたわたしたちにもごく自然に感じられます。

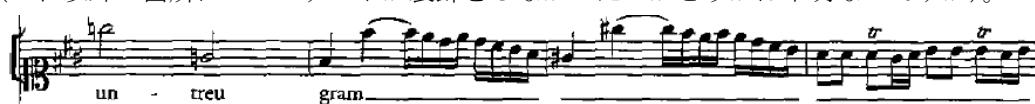


譜例1 ヒラー「咲いたばかりの魅惑のバラは」35-41小節



譜例2 ヒラー「咲いたばかりの魅惑のバラは」90-96小節

犬輔：一方、モーツアルトは第2節の中間、「深い悲しみ Gram」のところにコロラトゥーラの楽句を持ってきています（譜例3）。いわばヒラーは“事前の警告”に重きを置きましたが、モーツアルトは反面教師として“後の祭りの警告”に重きを置いたということでしょうか（これ以外の箇所にモーツアルトが装飾をしなかったのかどうかは不明なのですが）。



譜例3 「咲いたばかりの魅惑のバラは」K.365a 27-30小節

鳥代：因みに、ヒラーは「不誠実、深い悲しみ、嫉妬 Unitreu, Gram, Eifersucht」という単語を短く、停止したフレーズで設定しています（譜例4）。



譜例4 ヒラー「咲いたばかりの魅惑のバラは」59-61小節

犬輔：モーツアルトが K.365a の印象的なメロディを複数の曲と共有していることを見ておきたいと思います。それはのちにクラリネット協奏曲 K.622 でソロ・クラリネットが譜例5のように奏する楽句です。



譜例5 クラリネット協奏曲 K.622 第1楽章 A管クラリネット 61-65小節

鳥代：その楽句は偽作のサンフォニー・コンセルタント変ホ長調 K.297b の第2楽章のソロ・オーボエに出て来る（譜例6）ので、真作説を唱える人の根拠ともされているのね。



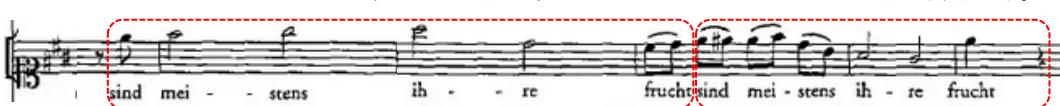
譜例6 サンフォニー・コンセルタント K.297b 第2楽章 ソロ・オーボエ 33-37小節

犬輔：アリア「もし私の唇を信じないなら」K.295 Ver.2 にも出てきますが、フレージングが異なっています（譜例7）。



譜例7 アリア「もし私の唇を信じないなら」K.295 Ver.2 テノール 92-97小節

鳥代：K.365a は K.295 Ver.2 とよく似ていますが、さらに別のフレージングです（譜例8）。



譜例8 アリア「咲いたばかりの魅惑のバラは」K.365a ソプラノ 22-26小節

犬輔：K.295 Ver.2（譜例7）とK.365a（譜例8）は以前から気付いていましたが再考すると、譜例7はフレーズが一貫して4拍目から歌われますが、譜例8は最初が4拍目から、後半の繰り返しが2拍目から歌われるため、後半は1拍目から始まる2小節でひとまとまりのフレーズに聞こえます。これは声楽的には間違った聞き方ですが、器楽的には許容されるでしょう。ただしそう解釈すると最後の四分音符が付け足しに感じてしまいます。

教授：それはクラリネット協奏曲を知っているからこそその錯覚ではないか。素直に聴けば弱拍は4拍目でも2拍目でもいいはずだからだ。

鳥代：でも、わたしも犬輔さんと同じに聞こえます。ただし、ドイツ語のネイティブスピーカーでないからかもしれませんので、この問題はひとまず保留にしておきましょう。

6.まとめ

犬輔：ザルツブルク公演でシカネーダー座に提供した曲がK.365aだけだったとは考えられません。いくら忙しかったからとは言え、家族のフリーパスの便宜まで図ってもらっている状況下で他に何も協力しないことはありえないでしょう。

教授：レーオポルトからヴォルフガング宛ての1780.12.2付け手紙を読んでみよう。K.365aに対するお礼の後の文章に注目だ。

シカネーダーさんがアリアのことでおまえにお礼を言っています。私はオペラ・ブッファからアリア「胸のうちにわしが聴くのは」[K.196第3曲]も、彼のために書いて上げなければなりません。彼は自分用にかなり立派な空気銃を買いましたが、明日、私たちはそれを射ってみます。

犬輔：シカネーダーはレーオポルトとの射撃を楽しむために自分用の空気銃を奮発したんですね。

教授：そこではない。その前だ。

犬輔：レーオポルトはヴォルフガングの既存の作品から芝居に使えそうな曲を自ら写譜してあげていたということですか。でも、出来合いの曲が芝居に合うものなのでしょうか。

鳥代：その曲は確か市長のドン・アンキーゼがオーケストラの楽器の特徴を歌い上げています。フルート、オーボエ、ヴィオラ、ティンパニ、トランペット、ファゴット、コントラバスが名指しで奏されるのです^{注14}。オーケストラ楽器が主役になるので、芝居の筋がどうあれ挿入が容易であると言えるでしょうね。シカネーダー自身が歌ったと思われます。

犬輔：シカネーダーはモーツアルトに続いて、一座を引き連れてヴィーンに出てきました。1784.11.12付けヴィーン日刊新聞 Das Wienerblättchen は次のように書いています「5日の金曜日、シカネーダー氏とクルムプフ氏は、ドイツ俳優・歌手協会と共に[ケルントナートアで]舞台をオーブンしました。人気の[モーツアルトの]シングシュピール《後宮からの誘拐》が上演され、協会は当然のことながら一般聴衆からの拍手を受けました」。この公演には、皇帝ヨーゼフ2世も臨席しており、シカネーダーの公演が財政的にも非常に成功したため、皇帝自身がシーズン中に常設の劇団を設立することを提案しました。1785.2.3、シカネーダーと彼の一座はボーマルシェの喜劇『フィガロの結婚』のドイツ語版の初演を準備しました。しかし皇帝はこれが権威に批判的であり「攻撃的」であると判断し公演を禁止。シカネーダーは彼の劇団をあきらめなければなりませんでした^{注15}。

鳥代：この後は《魔笛》を含むモーツアルトとの協業に発展していくことになるのね。

犬輔：ところで、音楽的な分析が不十分になりましたが、エッジによればR.レヴィンがK.365aとK.119の共通点を挙げているといいます。

教授：では、次回はK.119との関連を取り上げることとしよう。

注1：Dexter Edge: "A newly discovered autograph source for Mozart's aria, K. 365a (Anh. 11a)," Mozart-Jahrbuch 1996 (Salzburg: Internationale Stiftung Mozarteum 1996), 177-196. [∞](#)

注2：原研二：「シカネーダー伝『魔笛』を書いた興行師」、新潮選書、1991

注3：Wikipedia: Bölklschiessen (英語) [∞](#)

注4：Rudolph Angermüller (Herausgeber), Rudolf Geffray (Herausgeber): Marie Anne Mozart, meine tag ordnungen: Nannerl Mozarts Tagebuchblätter 1775-1783 mit Eintragungen ihres Bruders Wolfgang und ihres Vaters Leopold, K.H. Bock, 1998

注5：『邦訳書簡全集』IV, p.478, p.520

注6：Johann Gottfried Dyk: Wie man sich die Sache denkt! oder: Die zwey schlaflosen Nächte [∞](#)

注7：Henry W. Sullivan: Calderon in the German Lands and the Low Countries: His Reception and Influence, 1654-1980, Cambridge University Press, 1983, digitally printed version 2009 [∞](#)

注8：Dexter Edge 前掲書

注9：Dexter Edge 前掲書

注10：Dexter Edge 前掲書

注11：Henry W. Sullivan 前掲書。ゴッターはベンダ《メディア》の訳詞や伝モーツアルトの子守歌の作詩で知られる。

注12：Christian Gottlob Neefe: Vademecum fuer Liebhaber des Gesangs und Klaviers, Dyk, 1780 [∞](#)

注13：ヘルマン・ゴチエフスキイ：国境を越える音楽（韻律と翻訳の問題を中心に）[∞](#)

注14：野口秀夫：神戸モーツアルト研究会第276回例会 22頁 [∞](#)

注15：Benjamin-Gunnar Cohrs: Der zweite Vater der Zauberflöte, Emanuel Schikaneder [∞](#)